

蕭乾・文潔若訳の『ユリシーズ』

葉 紅

作家であり、ジャーナリストでもある蕭乾（1910～1999）が翻訳を手がけた作品は、『シエクスピア戯曲集』（《莎士比亚戏曲集》）¹⁾、『The Life and Death of Jonathan Wild the Great』（《大伟人 江奈生 魏尔德传》）²⁾、『よき兵士シュベイクのさまざまな体験』（《好兵帅克》）³⁾ など、1950年代後半に上梓した作品以外、中国の翻訳界に大きな足跡を残したと言って過言ではないジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』《尤利西斯》⁴⁾（1994年中国語初翻訳出版）がある。

『ユリシーズ』の原作が出てから、実に70余年を経た後の初めての中国語版訳である。作家蕭乾の妻であり、自らも翻訳家である文潔若の強力な後押しを得て、二人三脚で20世紀の巨著の翻訳に挑んだ。「今回（の翻訳作業）は潔若が機関車（の役割）そのものでした」と蕭乾は後に回想しているが、齢80も過ぎ、自身の人生の集大成の作業になると、作家も意識したであろうことは想像に難くない。

本稿は、研究者たちが到底自分の手に負えないと口を揃えて言うこの巨著の中国語訳を完成させた過程に見る作家蕭乾の心象を、残された手記、エッセイから読み取ろうを試みた。また妻文潔若へのインタビューから、共同訳者としての思い入れや翻訳の工夫を明らかにすると同時に中国の翻訳文学の制約の一端を覗くことにする。

I

意識の流れの小説として知られる『ユリシーズ』はアイルランド人のジェームズ・ジョイス（1882～1941）が著した長編小説である。出版にあたり、当時欧州の複数の出版社に断られ、1918年になっ

てようやくアメリカの前衛的な雑誌「リトル・レビュー」において一部連載にこぎつけた。それから四年後の1922年、フランス、パリの「シェクスピア・アンド・カンパニー」という小さな書店から初出版できたという経緯がある。「リトル・レビュー」に連載している間の1920年、『ユリシーズ』はニューヨーク悪徳防止協会によって、猥褻の故で告発され、発刊を禁止される憂き目にも遭い、正当に評価された作品ではなかった。ジョイスの母国のアイルランドでもこの作品を快く思わない人たちがいて、長いこと認められなかった。しかし、アメリカで発売禁止になった話題の小説ということで、パリでの読者獲得にかえて勢いをつけた形になり、刊行して一ヶ月あまりで売り切れてしまうという予想外の展開になった。

『ユリシーズ』はギリシャ神話『オデュッセイア』に物語の構成原型が見られる。トロイア戦争後、主人公のオデュッセウスが20年も放浪した後、妻と再会するのを描いた『オデュッセイア』に対し、『ユリシーズ』は1904年6月16日のわずか一日のうちの出来事が描かれている。近年の各国の翻訳、出版により、世界中の読者がジョイスワールドに魅せられ、今日ではこの日を「ブルームズデイ」と呼んで、世界各地でイベントを催すほどになった。

『ユリシーズ』は『オデュッセイア』と筋を対応させて描くことにより、混沌とした現代を古典によって秩序づけようとする狙いがあると考えられる。作中の主な登場人物が3人のみの、たった1日の行動と意識を重層的に描いた『ユリシーズ』は注目され、後世の文学に多大な影響を与え、それは多方面にわたるが、一つには描き方の手法とその文体がある。そのことは間違いなく他言語へ

の翻訳作業をより難しくし、蕭乾・文潔若の中国語訳も例外ではなかった。このことは後に触れることにする。

『ユリシーズ』は内的独白と表現される描き方の技法と並行し、回想、追想が織り交ぜられ、話題及びストーリーの展開が不意に飛び、脱線続きの広がりを見せる。言葉自体も難解でジョイス独自の造語が多く、通読するだけでも骨の折れる作業になり、『ユリシーズ』を読むのではなく、常に「再読する」と言ったほうが正確だと研究者の間では共通認識になっている。

日本では、昭和初期、1931年に伊藤整・永松定・辻野久憲共訳の『ユリシーズ』⁵⁾が出版され、数年後に岩波文庫からも全5巻の『ユリシーズ』本が出された。その後者のほうが蕭乾と文潔若が1980年代中頃中国国内で確認できた版である。さらに、1996年、丸谷オー・永川玲二・高松雄一共訳『ユリシーズ』⁶⁾が世に現れ、中でも、丸谷は第十四挿話を日本古典の万葉集、古事記の文体を取り入れた翻訳を試みたことが特徴として挙げられる。同1996年、柳瀬尚紀訳『ユリシーズ』⁷⁾3冊本（完訳ではない）が出版され、これまでの既訳を痛烈に批判したことで話題をよんだ。

評伝の訳書では、『肖像のジェイムズ・ジョイス』⁸⁾（柳瀬尚紀）、『ユリシーズを燃やせ』⁹⁾（小林玲子訳）がある。日本におけるジョイス受容を詳述したものとしては、『昭和初年の「ユリシーズ」』¹⁰⁾（川口喬一）をあげることができる。主人公ブルームの足跡を辿って、『「ユリシーズ」の謎を歩く』¹¹⁾（結城英雄）など、ダブリンの街を歩く案内本にもなる研究書も数多く出版されている。

一方、中国では、1994年の蕭乾・文潔若の翻訳が出るまで、『ユリシーズ』は紹介されることがなかった。

II

ここで、『ユリシーズ』が世に現れたほぼ同時

期の中国文学界の状況を見てみることにする。

中国のこの100年来の文学の歴史を遡ってみると、方向付けとなった出来事の一つとして、白話革命がもたらした変革を第一に挙げる必要がある。文言文が一般的だった表現法から抜け出し、白話文への転換、すなわち話し言葉を用いて文章を作成すると推奨したのが胡適¹²⁾であった。この発想は日本の明治初期の言文一致運動と相似している。1917年の雑誌『新青年』において、胡適は「文学改良芻議」と題して、白話文による近代文学の確立を提唱した。これには陳独秀¹³⁾など知識人の唱和を得た。さらに、1918年5月白話小説の第1号と評される魯迅の「狂人日記」が発表された。この言わばポピュラーな書き言葉を使用しようとする機運がその後の新文化運動の言語表現の変革の下地になった。

この時期にほぼ並行して翻訳文学も新たな局面を迎えた。

嚴復（1854-1921）が Huxley・Thomas・Henry の『進化論と倫理学』の中国語訳『天演論』を世に送り出し、社会進化論の概念を中国社会に広めた一方、翻訳学についても独自の「信、達、雅」を唱え、後世にまで重要視されるモットーになっている。

「アジアの近代にとって翻訳は重要な意味をもち、中国でも19世紀後半から科学技術や政治制度面ではそうであったが、こと文学に関しては、翻訳対象からはほとんどはずされていた。それが梁啓超や康有為の政治小説の提唱とともに奨励されることで、注目されるようになる。20世紀の中国小説形成に、直接、外国文学を翻訳するという作業は文化の変容にとって仏典翻訳以来の大きな意味を持っているともいえる」¹⁴⁾

この時期中国国内では、五・四運動を経て、知識人がマルクス主義に期待を寄せるようになり、社会主義に傾倒する雑誌が相次いで創刊したが、国民党と共産党の提携、分裂、提携を繰り返す中、おぼろげながらも自らの理想としたい将来のモデ

ルを作り出していった。そんな中で、盧溝橋事件¹⁵⁾をきっかけに起きた日中戦争が全中国に拡大し、毛沢東が率いる共産党が国内の一致団結を呼びかけた。中国を取り戻すための「農村から都市へ」という毛沢東の理念は、中国の全人口の8割が農民という認識に基づいたもので、その日の食事事も事欠くほど貧しい農民たちが戦いの主力兵士であった。そのため演劇、音楽などは農民が享受できるものでなければならぬと考えられ、それが第一義に掲げられた。農民以外の知識人は抗日戦争に加わるのであれば受け入れはするが、芸術性よりも革命を重んじる知識人になるよう、思想改造が必要とされていた。後の毛沢東の中国共産党内における権威的な地位の確立により、このことが絶対視するようになっていった。

1942年5月、毛沢東の「文艺工作者要同工农兵相结合」¹⁶⁾「芸術活動に携わる人は工農兵（労働者、農民、兵士の意。この時代は、レベルの高い教育を受けたことがない労働者階級を指した。以下、工農兵のまま使用する一著者注）に協力しなければならない」の一文で、文学、芸術の従事者は労働者、農民、兵士側に立つべきだと論じ、文学は大衆のためのものでなければならないという趣旨の内容が発表された。

「他们最基本的问题就是文学艺术要不要为工农大众，服务于工农大众，向工农大众普及，再从向他们普及中间来提高等还没有解决。」

彼ら（知識人を指す）が当面抱えている最大の問題は、すなわち、文学、芸術は工農兵のためにあり、工農兵に奉仕し、工農兵の間で普及させ、その上で、高みを目指すということは未解決である。

「只要是艺术的东西，只要是艺术水平高的文学作品，就认为是好的。他们特别强调这一方面，而对立场问题，观点问题，马列主义基本观点问题，向工农兵取材问题，给谁读的问题，与工农兵密切结

合或完全为工农兵这些问题，认识不清楚。」

知識人の中では、芸術的なものであれば、また、芸術性の高い文学作品であればよいものと認める人がいる。その部分はとりわけ強調されるが、立場や観点の問題、マルクス・レーニン主義の観点、工農兵から取材する問題、誰に読んでもらうかの問題、工農兵と緊密に繋がり、またはすべてが工農兵のためにといった問題への認識がない。

さらに、同5月に開かれた座談会で、毛沢東の「延安における文学・芸術座談会での講話」という後に「文芸講話」と呼ばれるものが翌年の秋に発表された。これは抗日戦争中の解放区に見られる芸術至上主義の偏向を正した内容のものであるが、その後の毛沢東の支配的な地位により、不動のビジョンとされ、文芸界に関わるすべての作家、研究者に否応なしの遵守を求められた。結果的に中国の文芸の指向を定めたものとなった。

要するに自由な発想で、自由に創作活動を行うことは上記の枠組みの中に組み入れられ、制限されることになったのである。

III

中国の文芸界の中で醸成される特殊な空気がある一方、作家蕭乾に取り巻く状況はどんなものだったか見てみることにする。

蕭乾が『ユリシーズ』との出会いはケンブリッジ大学に在学中に遡るといふ。彼はそれより以前に燕京大学にいた時から、作家ジェームズ・ジョイスの名前を耳にすることはあったが、『ユリシーズ』を入手するすべがなかったようだ。

1942年、ケンブリッジ大学で英米文学を学ぶ蕭乾が渡されたのはヘンリー・ジェームズ¹⁷⁾（1843-1916）とヴァージニア・ウルフ¹⁸⁾（1882-1941）の作品だった。蕭乾の興味の対象はもっぱらエドワード・モーガン・フォスター¹⁹⁾（1879-1970）にあったが、小説は、ストーリーがなければならないというフォスターの主張の

反対側に立つジェームズ・ジョイスを読むようになった。それは第二次世界大戦の最中であつた。

蕭乾は『ユリシーズ』の思想、技法、文体、表現のありとあらゆる面において繰り上げられたジョイスワールドにとりつかれつつも、その難解さに閉口したという。その一方、中国の国情と中国の文芸界が置かれている状況から、次のような思いを抱いたという。

「当時一边读得十分吃力，一边可又在想，不管你喜欢也罢，不喜欢也罢，它总是本世纪人类在文学创作上的一宗奇迹。同时，我心里也一直很明确，这不是中国作家要走的路。我们还太穷，太落后，搞不起象牙之顶。我们的小说需要更贴近社会，贴近人生。」²⁰⁾

「(略) 同時に私の中では、これは中国の作家が歩む道ではない。中国はまだあまりに貧しく、あまりに立ち遅れていて、我々には象牙の塔を極めるだけの力を持っていない。我々の小説はもっと現実社会と人々の生活の近くにあるべきだ。」

それでも、蕭乾は『ユリシーズ』を購入し、1948年の帰国時に千冊を超える他の書籍と共に中国に持ち帰った。この作品は世界の文学史上の奇跡になると確信し、中国の文芸指向に合わず、到底受け入れられないだろうが、このような偉大な作品が世にあることを中国の文芸活動に携わる人々にも知ってもらう必要があると続けて書き記している。

「可同时又觉得在中国从事文学写作或研究的人，应该知道西方有这么一本书，了解它的艺术意图和写作。」

「しかし、中国で文学の創作活動や、研究に従事している人たちは、西側社会にこのような本が存在し、その芸術的な創意と手法を知っておくべきだと思った。」

蕭乾は十代の終わりの頃、国民党によって逮捕される事件が起きたが、彼は共産党に歩み寄るかどうかもまだ定まっていなかった。彼は幼少期に母親の教育だけは何としても受けさせたい執念とも言えるほどの思いに支えられ、私塾に通い、従兄のアメリカ人の嫁から英語を教わり、後に絨毯工場で働きながらキリスト教の学校に通ったという生い立ちについては拙稿の「蕭乾と楊剛-蕭乾の作品を手がかりに」²¹⁾で取り上げている。そういう文化的な背景にある彼が在英時代に『ユリシーズ』を手にするも、まだ30代の青年、わが祖国はこのような作品を受け入れられないであろうと彼は考えたのである。文学はもっと社会の近く、人間の近くにあるものでなければならないという考えは彼の中にまだ形成されてはいないにもかかわらず、漠然とした思いが彼の中で形成されはじめていた。

その裏付けになる資料がのちに発見された。

1940年在英中の蕭乾から胡適へ送った書簡があったのを50年近く経った後、中国近代史研究所より知らされ、作家の手元に届けられた。

「此间（指东方学院）工作已谈不到，心境尤不容易写作。近与一爱尔兰青年合读 James Joyce（乔伊斯）的 Ulysses（尤利西斯）。这本小说如有人译出，对我国创作技巧势必大有影响，惜不是一件轻易的工作。」²²⁾

「ここ（School of Oriental and African Study）での仕事はすでにこれというものがなく、創作活動をする心境にもまた至らない。最近あるアイルランド出身の青年と一緒にジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』を読んでいる。この小説を誰かが訳し出せば、我が国における文学の創作活動の手法に大いに影響を与えるであろう。たやすい作業ではないことだけが気がかりだが。」

これは40年代初頭の蕭乾が置かれた状況と彼の

心境をダイレクトに伝えた資料であることは疑う余地がありません。50年近く経った90年代にまさか蕭乾自身がその翻訳に携わることになるとは作家が想像し得ただろうか。

IV

蕭乾が中華人民共和国成立の前夜の1948年に「人生の大きな交差点に立たされた」と彼自身言うように自分の身の振り方をいかにするか、大きな決断に迫られた。一つは家族と共に大戦時に滞在したケンブリッジ大学で中国文学の教員になるか、または中国に戻るかの人生の分岐点にいた。彼は国内外の知人、友人の助言をもらい、忠告を聞きながらも、最後には中国に戻る決断をしたことについては、拙稿の「信念の一人蕭乾」²³⁾にまとめてあるので、そちらを参照していただきたい。この時に選んだのは、祖国に戻ることだった。

しかし、蕭乾は帰国の途についてもその先のことに対して懸念がなかった訳ではない。彼が雑誌『観察』に載せた「J・マザリクの遺書に擬して」²⁴⁾の一文に記された通り、蕭乾の中に戸惑いが少なからずあった。第三次プラハ窓外投擲事件とも言われるヨーロッパの国々を震撼させた出来事は蕭乾にも困惑を残してくれた。1948年、チェコスロバキアの外相、ヤン・マザリクの屍体が外務省の中庭で発見される事件で、自殺か他殺か不明であった。ヤン・マザリクは共産主義政権との関係を苦慮していたという噂だけが一人歩きした。この一文はJ・マザリクになりかわって心情を吐露する人物に蕭乾を重ねて読むことができる。ケンブリッジ大学での仕事を勧めてくれたハルーン教授もやんわりではあったが、知識人は共産主義政権との共存は難しいと忠告してくれていた。まだ共産党の教育を直接受けていないにせよ、蕭乾の気持ちに引っかかっていた。

中国共産党員の楊剛女史²⁵⁾の導きもあって、根無し草のように外国で行き倒れだけはなりたくない蕭乾の信念で帰国したものの、欧州帰りで内戦期に共産党の根拠地に行ったことがなく、共産

党と共に行動したことがない。前線で祖国のために我が身を捧げるべく活躍したわけではない自分と周囲との間では、重苦しいものがあった。それは帰国した当初から、丁重に扱われながらも、何かが立ちほだかっているような一抹の不安を蕭乾が感じられた。

1954年文潔若と結婚して入居した、もともと味噌園²⁶⁾だった新居の近隣でもそういう目で見られていたという。その界限は戦争中、勝利をかちとり、共産党の根拠地から北京に入ったいわゆる功労者ばかりが住んでいた。その人たちとそうでない蕭乾の間に階級の差が出来ていた。異なる数世帯が隣近所で暮らす中、唯一共産党員ではない蕭乾が味わった疎外感から、自分の置かれる立場を強く意識させられた。知識人としての自分の今後は普通の暮らしから意識させられていたという。49年以降の中国に貢献すべく、あふれるばかりの熱い情熱で帰国を選択した自分は思想改造される側であり、文筆業も共産党の主軸を構成している工農兵を描くことしかできないと彼が悟っていった。もっともそれすらも叶わない運命が後に待ち構えていた。

自由に描くこと以前に、知識人は教育されるべく、共産党のための創作活動、また工農兵に奉仕する立場にあるような教えを蕭乾も他の知識人と同様受け入れざるを得なかった。

V

1966年、中国は「文化大革命」の災厄の中にあつた。

はじめて「文化革命」という語を目にした時、私はすぐ民主と科学とを標榜した五四運動を連想した。文化が革命されれば、必然的に人間のいっそうの解放が意味される。ところが思いもよらず、実はそれは「封建主義」プラス「ファシズム」の二重の奴隷化だったのである。²⁷⁾

蕭乾はこのように当時を回想した。道徳、価値

観のすべてが否定され、人類の英知とされてきた文化財のすべてがぶち壊しの対象になり、人間の生きる尊厳さえも奪われた時に「もうおしまいだ、何もかも終わった」と思った。生きるより死んだほうがましだとの思いが彼の脳裏をよぎった。同年9月のある日に、実際睡眠薬を大量に服用して自殺を図った。病院に運ばれ幸運にも助けられた蕭乾に妻の文潔若は「生きよう、1日でも長く生きよう。悪人どもの死を見届けるまで、我々は生き延びるのだ。我々が死ななければならぬ理由はどこにもないのだから。」と蕭乾に言ったという。

無実の罪を着せられても、ひたすら耐え忍ぶ術を学び、妻文潔若の支えにより、生き抜いた蕭乾は「文化大革命」の終息を迎え、再度執筆活動が可能になった頃は、1980年に入り彼が70代に入ろうとしていた。

南京訳林出版社の李景瑞社長に『ユリシーズ』の翻訳を持ちかけられたのはそれからさらに10年経った後のことだった。40年代の初めに『ユリシーズ』を読んだ後、本のトビラに「天書」と記した蕭乾は訳すとなるとどんなに大変な仕事になるかはよく分かっていた。そのため、翻訳依頼を丁重に断った上、『ユリシーズ』を翻訳出版しても出版社に何の利益ももたらさず、かえって赤字になると忠告までした。李社長は、それは覚悟の上で、仮にそうであっても『ユリシーズ』の中国語版がいまの中国に必要であると告げられた時、蕭乾はその熱意に打たれたという。それでもすぐにこの巨著の翻訳を引き受けようとしないう蕭乾の傍らにいた妻文潔若の心が動いた。引き受けて共訳者になろうと言い出した妻に校正だけ担当するつもりでいた蕭乾は「動起手来就越陷越深、终于成为她的合译者了。」手をつけはじめたらが最後、とうとう妻との共同作業になっていった。

李社長は蕭乾と同じ世代の作家にこの『ユリシーズ』の翻訳を持ちかけた時に、それを引き受けることは「新たな境地においての自殺行為に等しい」(別开生面的自杀行为)²⁸⁾と言って、やはり

断られた経緯を蕭乾・文潔若訳が出版後に語られたという。それはどの国のジョイス研究者とも同じ思いで、簡単に手をつけられる作品ではない認識と共通しているものである。

その後の数年間の蕭乾夫妻は1日10時間以上のペースで翻訳作業に取り掛かっていった。

ジョイスの創作の手法に大いに戸惑いながらも、中国語に訳した時にまず読める文章にしないといけないという前提からのスタートだった。当然のように思えても実は簡単なものではなかった。挿話ごとに工夫が施されている原文への理解が第一に要求された。実際、ジョイス自身が『ユリシーズ』には数多くの謎をしかけてあって、それを読み解くのに今後の研究者たちが何百年もかけなければならないだろう」と言い残している。

まず言語においては、ヨーロッパの現代の複数の言語が使用されている以外、古代ギリシャ語、ラテン語などもよく使われていて、接頭語や接尾語のみで登場したりなど、文字のパズルの様相を呈している状態と蕭乾が前書きに記している。句読点さえ付けられていない部分はさすがに対応に悩んだという。内容においても、宗教、医学、哲学、法律、音楽、天文、植物など多方面の分野にわたり、調べつくす以外に各分野の先達に教えるを乞うようになった。

そういうこともあって、蕭乾夫妻の翻訳作業が中国国内外の注目を集めるようになり、とりわけ海外では大々的に報道された。あの「文化大革命」が終わって10年近く経ったとは言え、『ユリシーズ』が中国で受け入れられるようになるのか、まずそのことが驚きで報道されたのである。このかつて猥褻の本としての曰く付きの作品があつた中国で翻訳を始めている。それは中国文芸界の指向転換のサインと受け取ろうとする向きもあった。同時に翻訳の援軍に成るべく、資料の提供など多方面から寄せられた。

文潔若によると、自分は「信、達、雅」の「信」を何より大事に、つまり、原文にどこまでも忠実に、翻訳の過程では、どんな小さなパーツも落とすしてはならない精神で訳していった。これは二十

世紀の初めに嚴復が提唱した翻訳精神で、まずは「信」を重んじた。夫の蕭乾には中国語らしい文章にし、文意が通る上、流暢な文体になるよう推敲を重ねる作業に専念してもらったという。つまり、「達」と「雅」である。

VI

1994年、ついに『ユリシーズ』の中国語版の上梓を迎えた。

ジェームズ・ジョイスは「自分が母国のアイルランドに受け入れられないのは、ちょうどイプセンがノルウェーに認めてもらえないのと同じだ」と1936年代に話しているという。そういうジョイスの信念に作家蕭乾が惹かれ、最晩年の大事業となった『ユリシーズ』の翻訳について次のように書いている。

「那个曾经不被阿尔兰喜欢，最后成为自己国家一以至全世界光荣的乔伊斯屹立在我面前，几乎全世界都拥有了他那部以天才和学识向极峰探险的纪录——《尤利西斯》。现在我和我的妻子，把这一份瑰宝，译成我们的语言献给了具有五千年文明史的中华民族——我相信这是我生命年轮中镌刻下的深深的一圈，但还不是最后。我仍坚持我的梦。我对没有地图的旅行无怨无悔，直至终极。」（往事三瞥）

「かつてアイルランドに認めてもらえなかったにもかかわらず、最終的には祖国のアイルランドないし全世界の誇りとしてのジョイスが私の前に屹立している。ジョイスが天分と学識でもって探検した最高峰の記録『ユリシーズ』が全世界のほとんどのところにある。いま、私は妻と共にこの貴重な宝を私たちの言語に訳し、五千年の文明史をもつ中华民族に捧げた。この『ユリシーズ』の翻訳は私の生命の年輪にもっとも深く刻みこんだ年輪になるが、まだ最後の年輪ではないと信じている。私は果てる日まで夢を持ちつづけ、地図を持たない（人生の）旅行に悔いも恨みもない」²⁹⁾

別記

中国の現代女流作家、呉丹燕の短編小説「X ON THE BUND」で、上海に居住しているジョイス文学愛好者がジョイスを記念するため、毎年6月16日に上海の街を漫歩することを触れている。

注

-
- 1) 中国青年出版社 1956年
 - 2) 人民文学出版社 1956年
 - 3) 人民文学出版社 1956年
 - 4) 尤利西斯 上巻 译林出版社 2008年
 - 5) 第一書房
 - 6) 集英社
 - 7) 河出書房新社
 - 8) 河出書房新社 1995年
 - 9) 『The Most Dangerous Book The Battle for James Joyce's Ulysses』 柏書房 2016年
 - 10) みすず書房 2005年
 - 11) 集英社 1999年
 - 12) (1891～1962) 学者、思想家、北京大学学長。アメリカ亡命後、台湾に移り住んだ。
 - 13) (1879～1942) 革命家、思想家。中国共産党の設立者、初代総書記。
 - 14) 世界歴史大系 中国史 5 山川出版社
 - 15) 北京郊外の盧溝橋でおきた日本軍による発砲事件。
 - 16) 「毛泽东选集」第2巻 人民出版社 1999年6月
 - 17) 英米心理小説の先駆者、『ディジー・ミラー』などがある。
 - 18) 英国人作家『灯台へ』、『波』などがある。
 - 19) 当時禁じられていた同性愛のテーマも描く英国人作家。『インドへの道』、『モーリス』などがある。
 - 20) 同4) 3ページ
 - 21) 「駿河台大学論叢」第30号
 - 22) 同4) 30ページ「半世紀文学姻縁の結晶」（最

新修订本序) 文潔若

- 23) 「駿河台大学論叢」第53号
- 24) 『蕭乾散文』人民文学出版社 2008年 26ページ
- 25) 同23) 参照
- 26) 『未帯地图的旅人 回忆录』江苏文艺出版社 2010年 181ページ
- 27) 『地図を持たない旅人』下 蕭乾作、丸山登訳 花伝社 1993年 182ページ
- 28) 『水木清華』文潔若『水木清華』編集部 2012年第9期 27ページ
- 29) 『往事三瞥』蕭乾 鳳凰出版传媒集团 江苏文艺出版社 2010年 284ページ

その他の参考文献

- 「ホメロス 『オデュッセイア』戦争を後にした英雄の歌」西村賀子 岩波書店 2012年
- 『人生采访 蕭乾』作家出版社 2000年
- 『魯迅と毛沢東 中国革命とモダニティ』丸川哲史 以文社 2010年
- 『毛泽东选集』第7卷 人民出版社 1999年
- 『中国の現代文学』小野忍 東京出版社 1992年
- 『河出世界文学大系73 ジェームズ・ジョイス』河出書房新社 1980年
- 『魯迅・文学・歴史』丸山 登 汲古書院 2004年